

野育ちの鳩

石川達三

野育ちの鳩

(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十八年十一月十五日発行

定価三〇〇円

著者 石川達三

発行者 石渡磨須子

整版者 内田柳次郎

東京都文京区高田豊川町六〇
発行所 東方社

振替東京五七七七四番
電話大塚六一八七三番

(印刷・邦文堂印刷所)

長篇小説

野育ちの鳩

石川達三

目次

野育ちの鳩

5

誰でもがする事

113

平和な物語

131

女学生の食慾

153

春	虹	鳳	雪
	と		の
蛇	蝸	青	
	牛	華	
	の		宿
	室		

227	209	189	167
-----	-----	-----	-----

装
幀

生

澤

朗

野育ちの鳩

通り雨がばらばらと来た。志賀高原の真夏である。

見上げると、天の半分は快晴の青空で、他の半分は灰色の雲が切れぎれに流れていた。いま石橋秀吾が歩いている熊笹の細道が、ちようど青空と雲との境目になつてゐるらしく、斜になつた日光をうけながら、大粒の雨がばらばらと来た。

通り雨だ、と思つて彼はゆつくり歩いた。リュックサックを背負つた肩は汗でびしょ濡れになり、シャツをはだけた毛だらけの胸を汗の滴がつたつた。登山ステッキを横に握つて、彼は熊笹を分けてがさがさと歩いた。今日の行程は午前八時発^{ほつぱ}噴温泉を出発、それから大沼の岸に出て、その閑寂^{かんじやく}な山湖の景観に見惚れながら弁当を食つたが、たまらなくなつてざぶりと飛込んだ。肌をさす冷たい山の水で、文字通りに都塵を洗つた気持であつた。

正午ちかくそこを出発、独り旅の気楽さに歌をうたつたり、道傍の、もうせん苔をとつたりしながら、元池、四十八池あたりの湿地を過ぎた、そして熊ノ湯温泉の上にあたる、一望はてしなき熊笹の高原に出たところである。これから道を急いで、今日のうちに渋峠を越え香草温泉、白根火山の下を

通つて、草津まで行つて一泊しようという予定であつた。

高原の熊笹の大きな緑の葉は、斜の日を受けると遠くの方まできらめいて見えた。と、突然、通り雨は大粒になり、急にばらばらとはげしく落ちて来た。笹の葉に当る音は文字通り霰たばしるかと思われるほどであつた。このあたりには宿る木蔭もない。

石橋秀吾はたまらなくなつて走り出した。

走つてこの台地のはずれに出ると、急な坂道の下に赤い旗を立てた熊ノ湯の宿屋がたつた一軒見えて、玄関の前にブランコがあるのまで見て取れた。

彼は肩と背をはげしい雨に叩かれながら急坂をかけ下つた。そして古いブラック建てのような温泉宿の軒下に、立つた。

「畜生！ ひどく降りやがる」

そして背のリュックをおろし、軒下に積んであつた薪木に腰をかけて、息を切らしながらタバコを取り出した。早く晴れてくれなくては草津へ行けなくなる。もう午後三時を大分まわつていた。まだ草津までは渋峠の道を、ざつと三里半ぐらいもあつた。

煙草をすいながら眺めると、草津方面に当る横手山のあるあたりは白く雲に消えて見えない。いま降りて来た熊笹の台地もけぶつている。雨はますますはげしく、軒から走りおちる雫がたまらなかつた。

彼はリュックを抱いて宿の玄関に避^さけた。

「ちよつと休ませて下さいな」と声をかけて上りかまちに腰をかけた。

宿は一ぱいらしかつた。小学生の団体が来ていると見えて、小さい運動靴が何十足も土間にぬぎ散らしてあつた。赤犬が一匹彼の足もとに來て坐つた。

「これからどちらで御座んす？」と帳場にいる婆さんが声をかけ、洗茶をいれてくれた。

「草津へ行くんだけれど、……」

「はあ、それはお困りですな」

「ええ、早く晴れてくれんと言けなくなりますよ」

「左様々々。もうちよつと遅いですなあ。まあ峠さえ越えれば道は良うござんすから、暮れても行けなくはありませんがね」

石橋は軽い登山靴の足を投げ出して、玄関の外を走り流れる雨水を眺め首をかがめて空模様をうかがつた。空は段々暗くなり、雲は厚くなつていた。とうとう本降りであつた。

彼は三十分ばかりも玄関に坐つていたが、はれる見込がないと見て、泊ることにした。ところが宿は満員で室はないというのである。いろいろと交渉したあげく、それでは二室とつているお客さんに一室ゆづつ貰いましょうと番頭が承知して、ようやく靴を脱いだ。

通されたのは庭づたいに傘をさして行く別棟で、八畳と四畳半と二室だけの一棟である。その四畳半の方をゆずつて貰つたわけであつた。

室に上つてほつと一息つき、疊に足をのぼして見ると、庭に迫つた山々が白く雨に消されている風景は、万斛の涼味をさそい、八月とは思われぬほど山氣は冷えていた。彼は東京のK新聞の政治部記者であるが、政治部などには向かない程おとなしく質朴な男であつた。三十四歳の今日まで独身で、悪遊びにもひたらず、道楽といえはこうして独りきりの山歩きをすることと、尺八を吹くことだけであつた。K新聞は不況で、休暇も三日しかくれない。明日が最後で、あさつてからまた暑熱にうだりながら首相官邸詰の記者クラブへ出かけなくてはならない。

さて、無理をいつて一室をゆずつて貰つたのだから、隣客の客に礼をいわねばなるまいと、石橋は廊下からむこうをのぞいて膝をついた。

「御免なさい。室をゆずつて頂いてどうも恐縮でした」

すると、寝そべつていたらしく、ばたばたと人の起き上る氣配がして、八月というのに宿の櫛^{とてら}袍を着た若い娘が、三人まで顔を出した。

「いいえ、どういたしまして」

そう答えた女はたしかに東京から来た人と見えた。化粧の工合もウェーブした髪も美しく、きり

りとした顔かたちであつた。

「明日の朝発ちますから、それまで拝借します」

「ええどうぞ。……明日はどちらへですの？」

「草津です」

「私たちも明日草津へ行きますわ。お一人ですの？」

「ええ、僕だけです」

すると今一人の小肥りの女が、「独りで山を歩いて面白いかしら」といい、三人でげらげら笑つた。

「僕はいつでも独りです。暢気ですから」

「変つてゐるわねえ」と女は乱暴ないい方をした。石橋はその口ぶりから察して、もしかしたら東京の酒場か何かにいる女たちではないかと思つたが、それにしてはどこか品の良いところがあつた。あるいは我儘育ちのお嬢さんたちかも知れない。

「ま、おはいりになりませんか？」

「いや、汗になつていますからちよつと風呂へ行つて来ます」と辞退して彼は早速着物をきかえ、傘をさして風呂へ行つた。

湯槽はうす暗い木造で、硫黄の匂いが殊に強かつた。湯は黒く濁つていて、何か強烈な感じがあり、肌がぬるぬるした。

考えてみると、隣室には男はいないようであつた。女ばかり三人で山を歩いているものらしい。ほのぼのと彼は楽しかつた。最初に挨拶した美人の女が一番印象に強く、今一人の乱暴な口を利く小肥りの方は、ちよつと敬遠けいえんしたい感じであつた。

湯から上つて、ごろりと横になると、もうそろそろ夕飯がはじまるころであつた。雨は小やみもなく、時間が早いのにもう日の暮れる模様であつた。開け放つた宿の庭を、白い雲が濃霧のうむのようになつて過ぎていた。このあたりの海拔の高さが思われ、降りこめられたことも楽しかつた。

唐紙ざかいになつているので、隣室の話し声はつつぬけであつた。

「つまんないわね、降つてばかりいて……」

「トランプでもしようか」

「わたし腹がへつた」

「ビスケット有るわよ。食べる？」

「もうそろそろ御飯よ」

「あああ！ 今晚も刺身か。こんな山の中の刺身なんて、こわいみたい」

「御飯の前にお湯へ行つてこない？」

「賛成！」

「よく入るわね。三度目よ。これで寝る前に入れば四度よ。うだつちやう」

「うだつてもいいじゃないの。わたし行くわ」

「みんな行こうよ」

三人の話がきまつたようであつた。間もなく彼女等は傘をさして下駄をつつかけて、小庭の濃い霧のなかを歩いて行つた。

隣室が空になつた気配を聞くと、石橋秀吾はむくりと起き上つて、リュックをひらき、古風な緞子どんすの袋をとり出した。中には彼の愛用の尺八がはいつていた。尺八にかけては彼はかなりの名手であつた。

「となりの室へ来たのねえ、ちよつと良いじゃないの？」といったのは顔立ちの美しいきりりとした女であつた。父は金銭登録器会社の営業部長をしている相当の家庭の娘である。左千子は女子医専を出て、女医の資格があるけれども、職業をもつよりは結婚する方がいいといつて、毎日を遊び暮してい

た。いわば有閑生活の令嬢で、我儘な性格が都会的な生活習慣と結びついた、一種の跳ねつ返りであった。

小肥りのした榎野亜美は、区役所の事務員で、もう一人の大柄な気の利かない様子の泉協子と小学校時代からの友達であつた。協子は商業学校の先生の娘で、目下洋裁とか生花とかを勉強中というのであるが、あまり縁談もなさそうな、魅力の乏しい娘であつた。

草薙左千子がちよつと良いじやないの？ という隣室へ来た男を、榎野亜美は頭から反対した。

「そうかしら、わたしどうかと思うわ。洋服だつてよれよれだし……」

「それは雨にぬれたせいよ」

「靴下の色が左右ちがうのよ。見た？ あれも雨にぬれたせいかしら、野暮つたい青年よ。ちつとも洗練されたところが無いじやないの、ねえ！」

左千子は湯槽のなかで湯をはねかえしながら声に出して笑つた。

「いいじやないの。そんなの好きさ。もう身だしなみの良い青年なんかザラで、飽きちやつた。ちつとも個性が無いんだもの」

「汚くしているから個性があるとはいえないわ」と、泉協子は堅い理窟つぽい方をした。

彼女には女らしいうるおいというものが少く、湯の上に出ている上半身もがさがさと骨張つていた。

「それはそうよ。だけどあの人は個性があるじゃないの。まじめな青年よ」

「あなたは浮気ね」

「あら、怒つてんの」

「怒りやしないわ」

「じゃ嫉妬だわね。だけど、私が彼を愛したにしても、私の自由よ」

「愛したの？」

「そうらしいわ」とずばりといつて、草薙左千子は歌うような声で笑つた。それから榎野亜美の裸の肩をびたりと叩いていつた。

「ね、亜美ちゃん、明日の朝は彼と一緒に出発しよう。草津まで道行き。たのしいわね」

「わたし達邪魔だつたら後から行くわ」と泉協子はどこまでも拗ねて出た。

「うん、少々邪魔だけど、まあいいわ。ついてらつしやいよ。どういふことになるか」

「見たくないわ」

「この人ほんとに怒つたのかしら」と左千子は協子の背にざぶりと湯をぶつかけて、湯槽から跳ね上つた。

三人がまた傘をさして雨のなかを庭づたいに戻つてくると、したたり落ちる軒滴をくぐつて、素晴